

## 早稲田大学 人間科学部 古典 講評

### 〔総合分析〕

出題形式	マーク式
試験時間	90分（現代文2問、古漢1問）
出典	『都のつと』
解題	中世(1360年頃成立)の紀行文。宗久(そうきゅう)著。

### 〔大問別講評〕

大問番号	設問番号	コメント	難易度
(三)	問十六	<b>脱文挿入</b> ：ニの口語訳「どうしてももう少し急いで訪ねなかったのだろうか」。	易～標準
	問十七	<b>解釈</b> ：「空頼め」…当てにならないことを期待させること。前行「ねんごろに頼めし」の「頼め」は下二段活用で、「あてにさせる・期待させる」の意。	易～標準
	問十八	<b>主語</b> ：「宿の主」とは筆者を以前泊めてくれた、この亡くなった人を指す。イ・「いまはの時～」…亡き人が臨終に際しても筆者との再会のことを「申し」ていたこと。ロ・前行「この人(=亡き人)は～心を寄せ」と主語が明記されている。	標準
	問十九	<b>語句の意味</b> ：「無常」は「死」を意味する重要単語。文脈から考えられる。ニ・「悟りを得ていない～人」だからこそ、「無常迅速」=死が予告なく突然に襲うものであることに、今更ながら気づいた(思い知らされた)のである。	標準～やや難
		<b>語句の意味</b> ：「好く」は「風流の道に熱中する」こと。重要古語である。	易
		<b>文法</b> ：「ありし～」=以前の約束を違へ <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">E</span> と思って訪ねて来た、の意。 <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">E</span> には「～するまい」の打消意志が入る。	標準
		<b>和歌の修辞(掛詞)</b> ：「嘆き」と「木」。	標準
	<b>漢文</b> ：(1)「世俗」をヒントにすればよい。(2)「今生」で「狂言綺語(みだりにいう言葉)」の文学を作り、誤りをおかしている。この文学を「当来世世」(これからの来世)において、仏を賛嘆する縁(きっかけ)にしたいと願う、の内容。	やや難	